

1. 子どもの高次脳機能障がい家族講座・交流会

高次脳機能障がいで困りごとを抱える当事者・家族が、情報を入手したり、思いや体験談を共有したりすることができる機会を提供するため、令和5年度から家族交流会を開催。今年度は下記の通り家族交流会を開催。

- ・日時: 令和8年1月から3月（令和6年度参加者数: 6名）
- ・場所: 大阪府障がい者自立相談支援センターで調整中
- ・講師: 大阪医科薬科大学LDセンターの言語聴覚士に協力依頼予定

2. 子どもの高次脳機能障がいに関する実態調査を踏まえた支援ツール

■事業内容及び周知

- ・小児期発症の高次脳機能障がいは、学校生活における勉強や友達関係がうまくいかなくなることで当事者が孤立してしまい、症状の悪化や人格形成に悪影響を及ぼす可能性が高い。
 - ・一方、現在は小児期発症の高次脳機能障がいの支援状況等について、その実態が把握できていないことから、令和6年度に、補助事業を実施した。事業内容については、以下のとおり。
 - ①府内における小児期発症の高次脳機能障がいに関する実態調査
 - ②実態調査の結果を踏まえた、理解促進のための支援ツールの開発
- 補助事業者：地方独立行政法人 大阪市民病院機構 大阪市立総合医療センター
支援ツール：「こどもの高次脳機能障がいサポートブック」（A5 30頁）
- ・調査協力いただいた急性期の医療機関や当事者家族に配布
- また、大阪府障がい者自立相談支援センターのホームページに掲載

■今後の府としての展開

- ・府において、こどもの高次脳機能障がいサポートブックの内容を踏まえたチラシ（A4両面1枚）を作成中
- ・配布先
 - 各種研修 高次脳機能障がい支援者養成研修、地域別実践研修等、府が実施している研修において配布予定
 - 関係機関 市町村、小学校、中学校、高等学校、支援学校、放課後等デイサービス事業所、子ども家庭センター、保健所等に配布予定。



「議題3. 子どもの高次脳機能障がいについて」

こどもの高次脳機能障がい サポートブック

大阪市立総合医療センター
小児脳神経・言語療法内科
小児青年てんかん診療センター

九鬼一郎 温井めぐみ

大阪府高次脳機能障がい相談支援体制連携調整部会
大阪急性期総合医療センター 3階講堂 2025/9/18

通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果(令和4年)について

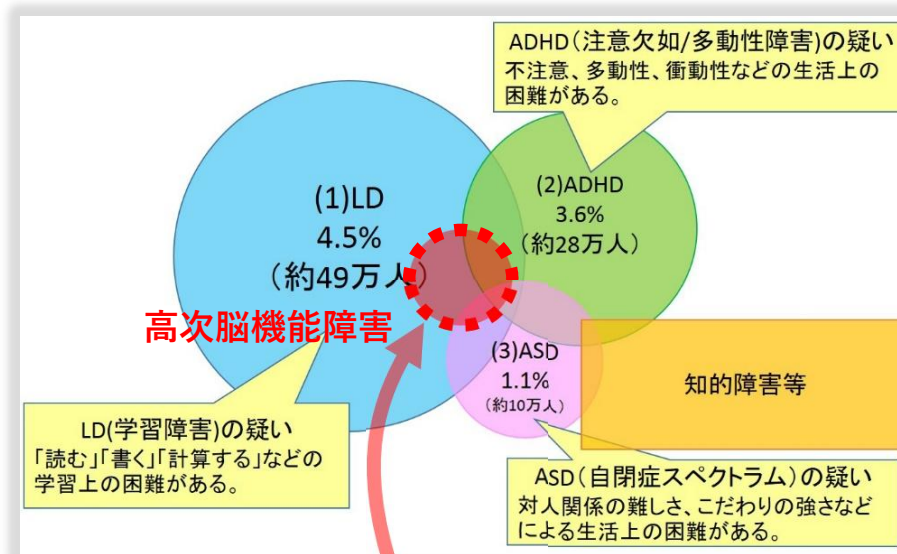
表1 質問項目に対して学級担任等が回答した内容から、「学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒数の割合

<小学校・中学校>

	推定値 (95%信頼区間)
学習面又は行動面で著しい困難を示す	8.8% (8.4% ~ 9.3%)
学習面で著しい困難を示す	6.5% (6.1% ~ 6.9%)
行動面で著しい困難を示す	4.7% (4.4% ~ 5.0%)
学習面と行動面ともに著しい困難を示す	2.3% (2.1% ~ 2.6%)

<高等学校>

	推定値 (95%信頼区間)
学習面又は行動面で著しい困難を示す	2.2% (1.7% ~ 2.8%)
学習面で著しい困難を示す	1.3% (0.9% ~ 1.7%)
行動面で著しい困難を示す	1.4% (1.0% ~ 1.9%)
学習面と行動面ともに著しい困難を示す	0.5% (0.3% ~ 0.7%)



2012年文部科学省「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」より

「後天性脳損傷児に関連する報告」

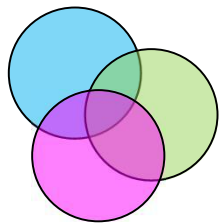
栗原まな 小児科臨床 (2010)

- ・ 支援学級教諭に対するアンケート調査 (神奈川県A市)
- ・ 後天性脳損傷による高次脳機能障害 ⇒ **全国約5万人**と推計
- ・ 生活上の問題：72%

無視できない数字

先天性 生まれつき

限局性学習症
注意欠如多動症
自閉スペクトラム症
など



後天性 脳損傷

頭部外傷
脳炎脳症
低酸素脳症
脳血管障害
など

急性期治療

てんかん
知的障害
運動障害
精神障害

高次脳機能障害

退院・通院・復帰

年余経て

日常・学校生活

Grow into deficit

後天性 脳損傷

頭部外傷
脳炎脳症
低酸素脳症
脳血管障害
など

①



急性期治療

てんかん
知的障害
運動障害
精神障害

高次脳機能障害

退院・通院・復帰

年余経て

日常・学校生活

Grow into deficit

②

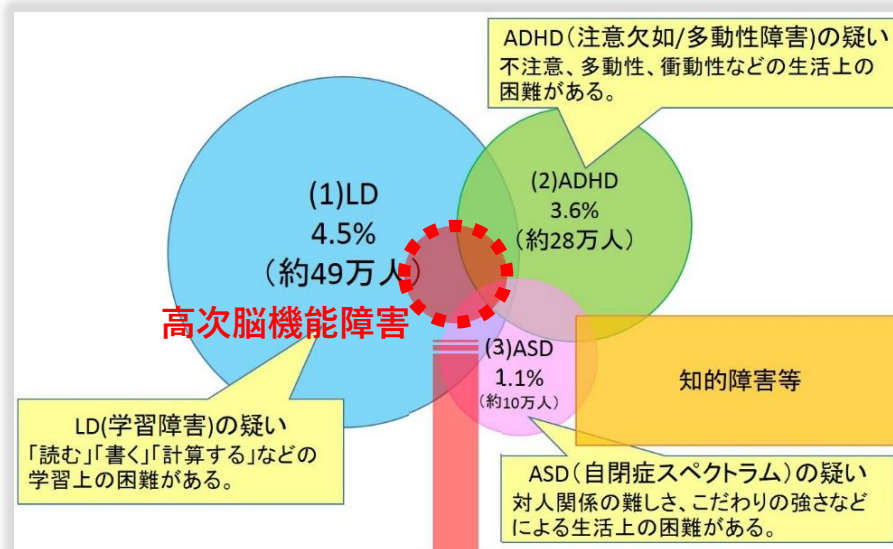
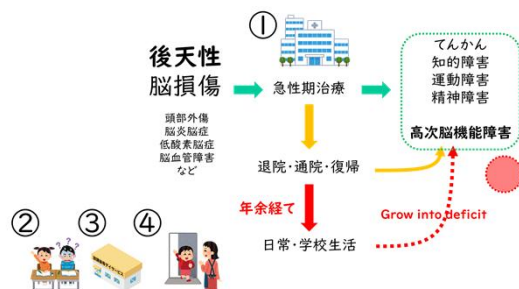


③



④





①医療機関へのアンケート調査

発症率, 医師の意識調査, 医療的問題, etc

②学校へのアンケート調査

実数調査 (推定), 教員のニーズ,
etc

④当事者インタビュー調査

保護者ニーズ, 要望, etc

③放ディへのアンケート調査

実数調査 (推定), 職員のニーズ,
etc

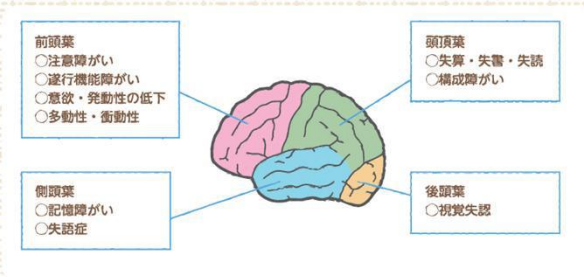


目次	
高次脳機能障がいとは	03
高次脳機能障がいって何？	03
どんな症状があるの？	04
こどもの高次脳機能障がいの特徴	09
発達障がいとの違い	10
こどもの高次脳機能障がいで気を付けること	11
評価と支援	14
評価	14
支援	15
学びと就労と社会参加に役立つ情報	20
調査結果	23
保護者からみた高次脳機能障がい	23
急性期病院からみた高次脳機能障がい	25
学校からみた高次脳機能障がい	26
放課後デイサービスからみた高次脳機能障がい	27
支援をつなぐ	28
病気やケガをしたときのこと	28
知ってほしい私のこと	29

高次脳機能障がいって何？

交通事故や脳梗塞などにより脳の一部分が損傷されると、知能・学力が低下したり、物覚えが悪くなったり、注意・集中することが苦手になったり、段取りが悪くなったり、言葉を理解したり表現したりすることが苦手になったりといった症状がでることがあります。これらの症状は「高次脳機能障がい」と呼ばれています。

脳は、部位によって、役割が決まっているため、損傷部位によって出現する症状は様々です。



03

高次脳機能障がいにはどんな症状があるの？

脳損傷を受けた部位や程度、時期によって、様々な症状を認めます。

以下の症状のうち 1 つだけを認めることもあれば、複数が組み合わさっていることもあります。

特に知能低下を認めない症例では、知能検査（後述）をしても高次脳機能障がいであるかどうかかわからず、適切な支援に結びつかないこともよくあります。



04

こどもの高次脳機能障がいの 評価方法は？

高次脳機能障がいは、周囲の要求水準が上がったタイミングで
困りごととして顕在化することがあります。
「就学前」「小学校 3～4 年生」「中学校 2 年生」「就職前」を中心
に、困りごとや悩みごとがでてきたタイミングで評価を行います。



主観的評価 インターネット上から無料でダウンロードできる質問紙の例

- | | |
|---------------------------------|---|
| ①小児脳腫瘍治療後の
神経心理学的合併症についての手引き | https://x.gd/Tq6gf |
| ②小児の高次脳機能障がい支援
ガイドブック | https://x.gd/7MT99 |
| ③病気の子どもの理解のために
—高次脳機能障がい— | https://x.gd/zPcbZ |

客観的評価

- | | |
|-------------------------------------|---|
| ①日本版ウェクスラー
児童用知能検査第 5 版 (WISC-V) | ▶対象：5 歳 0 か月～16 歳 11 か月
▶内容：知能検査 |
| ②日本版 K-ABC-II | ▶対象：2 歳 6 か月～18 歳 11 か月
▶内容：学習到達度、記憶 |
| ③日本版ウェクスラー記憶検査
(WMS-R) | ▶対象：16 歳～74 歳
▶内容：記憶検査 |

環境へのアプローチ② 環境調整

支援者が、本人の得意・苦手傾向を理解し、適切な環境調
整を行うことは、二次障がいの予防につながります。

以下に、「困りごと」に合わせた環境調整の例をお示しします。



01 記憶障がい

- ☑ **覚え方の工夫**
(得意な機能を活用する、語呂合わせで覚える など)
- ☑ **代償手段の利用**
(スケジュール帳・メモ・IT 機器を活用する など)
- ☑ **接し方の工夫**
(繰り返し伝える、忘れてしまうことを責めない など)

02 注意障がい

- ☑ **刺激の少ない環境を作る**
(席の位置を配慮する、机の上を整理する など)
- ☑ **接し方の工夫**
(注意を引き付けてから話す、個別に声をかける など)
- ☑ **課題設定の工夫**
(課題の量や内容を工夫しやる気ができるようにする など)

03 遂行機能障がい

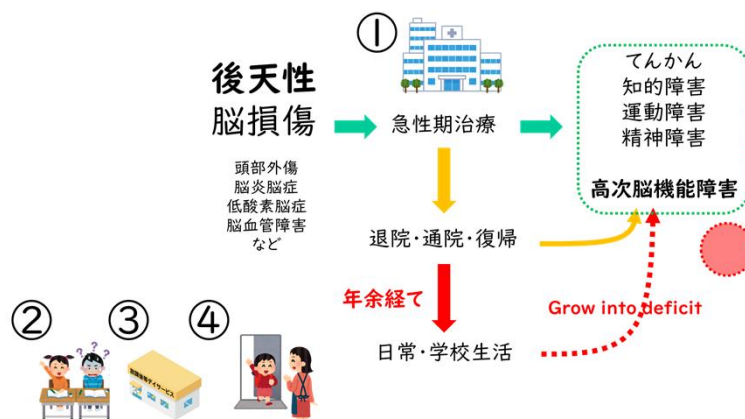
- ☑ **スケジュールを表示する**
- ☑ **作業を短く、単純化、ルーチンワーク化する**
- ☑ **今ある情報を整理し、見通しをつける手助けをする**

※小児脳腫瘍治療後の神経心理学的合併症についての手引きに
他の症状に対する合理的配慮の例を記載しています。(P34～39)

<https://x.gd/Tq6gf> 🔍



目次		高次脳機能障がいとは
高次脳機能障がいとは	03	評価と支援
高次脳機能障がいって何？	03	
どんな症状があるの？	04	
こどもの高次脳機能障がいの特徴	09	
発達障がいとの違い	10	調査結果
こどもの高次脳機能障がいで気を付けること	11	
評価と支援	14	
評価	14	
支援	15	支援をつなぐ
学びと就労と社会参加に役立つ情報	20	
調査結果	23	
保護者からみた高次脳機能障がい	23	
急性期病院からみた高次脳機能障がい	25	
学校からみた高次脳機能障がい	26	
放課後デイサービスからみた高次脳機能障がい	27	
支援をつなぐ	28	
病気やケガをしたときのこと	28	
知ってほしい私のこと	29	



急性期病院におけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査
 教育現場におけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査
 放課後等デイサービスにおけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査
 高次脳機能障がいのあるこどもの養育者に対するインタビュー調査

Report 01

急性期病院から見た 高次脳機能障がい

(小児救急を担当している府内 34 施設が回答)

調査方法: Google フォームを用いたアンケート調査
調査期間: 令和 6 年 10 月から 12 月まで

「後天性脳損傷」の種類

- ①小児 (1 か月から 15 歳まで)
- ②2024 年 4 月 1 日から 9 月 30 日まで
- ③脳画像病変を認める新規の脳損傷
- ④1 泊以上入院

→大阪府内で約 250 人 / 年の
後天性脳損傷



小児高次脳機能障がいの発生数

上記のうち、高次脳機能障がいを
発症すると予想される症例

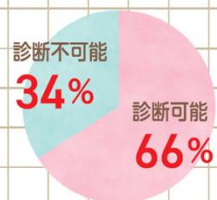
→約半数が高次脳機能障がいを
発症と推計



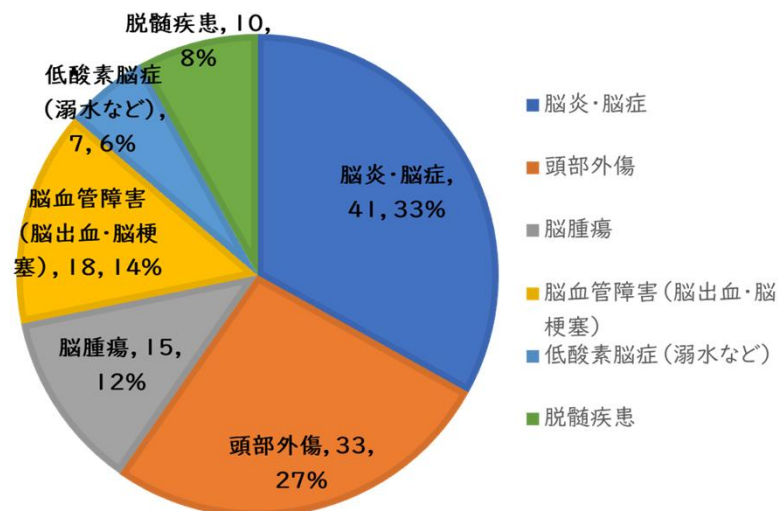
こどもの高次脳機能障がいの診断

6 割程度の施設で 診断可能

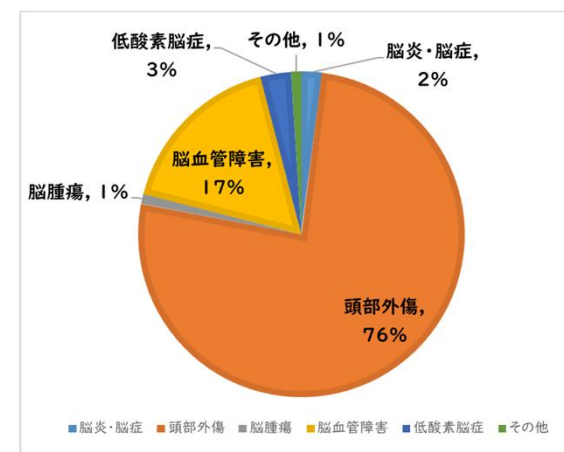
多くは小児科で行っているが、小児脳神経内科のある
小児医療センターへ紹介されているケースも。



25



成人期



高次脳機能障害支援モデル事業(2001-05)

Report 02

学校からみた 高次脳機能障がい

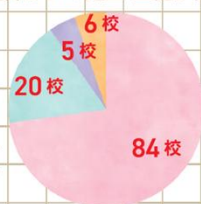
(府内政令市の小中及び府内高校 594 校が回答)
※小学校259校、中学校134校、高校140校、特別支援学校58校、その他3校
回答者：学校管理職・支援教育コーディネーターなど
調査方法：Googleフォームを用いたアンケート調査
調査期間：令和6年10月から12月まで

高次脳機能障がいの
児童・生徒はいますか

5校中1校で
高次脳機能障がいの児童・生徒が在籍

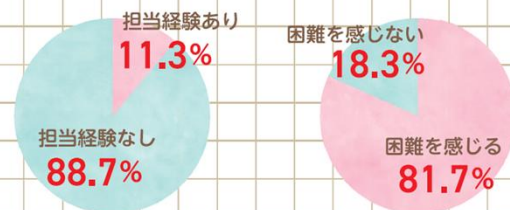


1人
2人～4人
5人～9人
10人以上



高次脳機能障がいの
認知度・担当歴

約半数で一定の知識がある、担当したことがあるのは約1割
約8割で「発達障がいや知的障がいのある児」と比べて、
対応の困難さを感じている



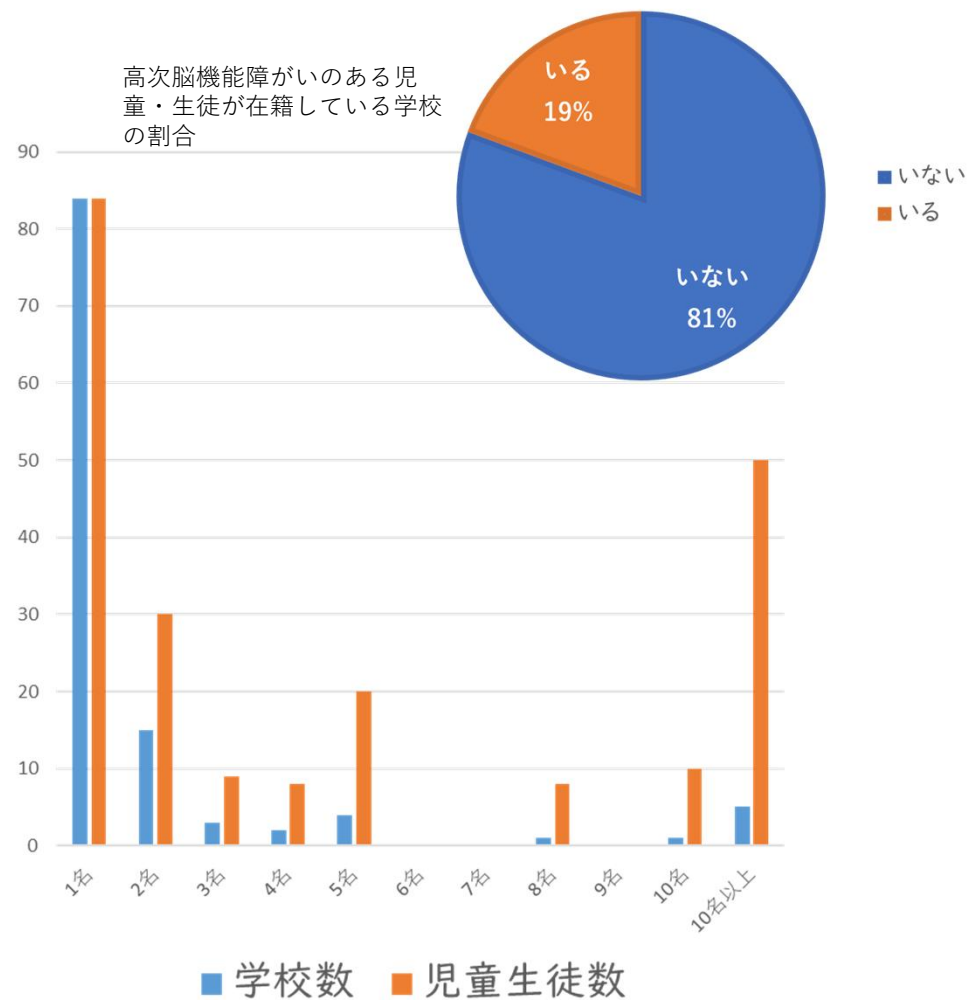
高次脳機能障がいとは

評価と支援

調査結果

支援をつなぐ

高次脳機能障がいのある児童・生徒が在籍している学校の割合



高次脳機能障がいのある児童・生徒が在籍している学校数と児童生徒数

Report 03

放課後デイ

(府下の放課後等デイサービス 544 施設が回答)

回答者：児童発達支援管理責任者など

調査方法：Google フォームを用いたアンケート調査

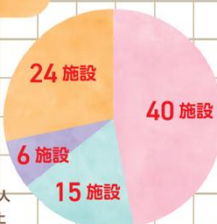
調査期間：令和 6 年 11 月から令和 7 年 2 月まで

「高次脳機能障がいのある児童・生徒」は
在籍していますか

約 **15%** で在籍している

そのうち約 **30%** で **10 人以上** 在籍している

■ 1人 ■ 2人～4人
■ 5人～9人 ■ 10人以上



「高次脳機能障がい」について
知っていましたか。

97.6% で知っていたと回答

(そのうち約 75% で一定以上の知識があった)

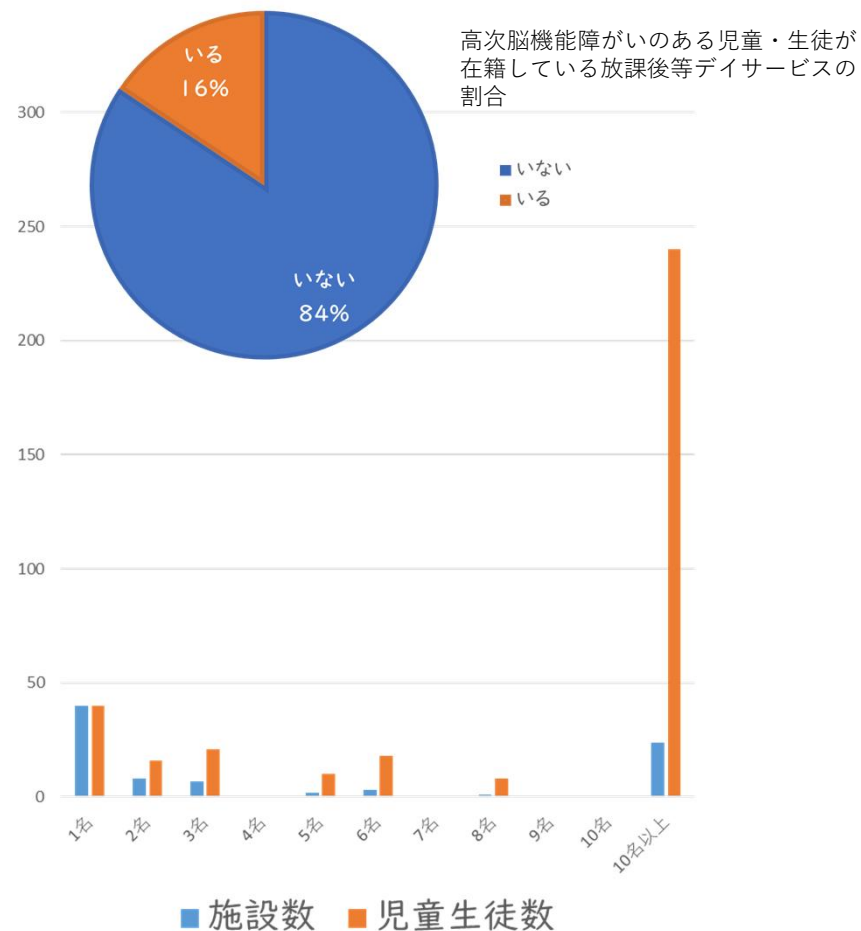
知っていた
97.6%

「高次脳機能障がいのある児」は
「発達障がいや知的障がいのある児」と
比べて、対応が難しいと思いますか

85.5% で

難しい・非常に難しいと回答

難しい・
非常に難しい
85.5%



高次脳機能障がいのある児童・生徒が在籍している
放課後等デイサービス施設数と児童生徒数

保護者インタビューより

ショックから立ち直る間もなく、 退院後の生活を構築することを求められる

- 退院して復学すると、できないことをリアルに突きつけられた
- 本人も親もしんどかったし、今もしんどい

本人の状態を理解することが難しい

- 日常生活の困った問題を、高次脳機能障がいの一症状として理解しているわけではない。
- できないのが、長期入院 / てんかん発作 / 麻痺の影響か、高次脳機能障がいの影響か分からない
- 今でも、症状と診断名を結びつけることが難しい

回復への期待が大きい

- 発症時は死ぬかもしれないと聞いていたが、そこから話せる・歩ける状態になって退院したので、時間がかかっても、元の状態に戻ると信じている
- 良くなるという期待が大きく、受け入れることは到底できない

調査対象：高次脳機能障がいのあることをもつ保護者 33 人
調査方法：半構造化インタビュー
調査期間：令和 6 年 8 月から 12 月まで

23

保護者インタビューより

保護者の負担

- 「1 人にできない」
- 「生活全般に手伝いが必要」
- 「通学・通院などの外出に同伴が必要」
- 「発作対応のために保護者の学校待機が必要」
- 「母親が仕事を变える必要があった」

将来の不安

- 「本人の理解が不十分」
- 「自立できるか不安」
- 「進路や就労に関する情報が欲しい」
- 「親がいなくなった後どうなるか不安」

医療に対して

- 「高次脳機能障がいの検査・診断を受けることで本人の状態が理解できた」
- 「病院からの書類で周囲の理解が深まった」
- 「外来の診察時間が短い」
- 「医療・教育・福祉がもっと連携してほしい」
- 「福祉などの情報が欲しい」

その他

- ・年齢が上がるにつれ友達に馴染めなくなっていくケースが多かった。
- ・麻痺など見た目にわかる障がいのある方が学校の支援への満足度が高かった。

高次脳機能障がいとは

評価と支援

調査結果

支援をつなぐ

24

■急性期病院におけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査

小児救急医療を提供している8割以上（大学病院・小児救急指定病院は全て）からデータが得られたため、府下全域の実態に迫る質の高いデータが得られた。

■教育現場におけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査

594校と多くの教育機関からのデータが得られた（回収率79%）が、Web調査という比較的簡便な手法でも、協力が得られない市町村も多く存在した。

■放課後等デイサービスにおけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査

既報が殆どないため重要なデータが得られた。544施設から回答が得られたが、回収率は24%にとどまった。

■高次脳機能障がいのあるこどもの養育者に対するインタビュー調査

33例の確定診断例に対して、詳細な問診と半構造化インタビューにより、臨床項目と高次脳機能障がいの関連を調査することができた。

■支援ツール作成→利用

該当患者の支援者へ手渡し始めている。大学教育学部の学生など関係者に配布している。

目次

[表紙・目次]	1
I はじめに	3
II 要約版	5
III 急性期病院におけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査.....	12
IV 教育現場におけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査.....	32
V 放課後等デイサービスにおけるこどもの高次脳機能障がいに関するアンケート調査	56
VI 高次脳機能障がいのあるこどもの養育者に対するインタビュー調査.....	77
VII 支援ソール.....	129
VIII 資料	134
IX 調査スタッフ	247

248ページの報告書に記載

大阪府のHPからダウンロード可能



謝辞： 大阪府福祉部障がい福祉室地域生活支援課